

女性の視線

——日本人旅行者の見たイタリア（3）——

馬郡沙河子

真 銅 正 宏

馬郡沙河子『欧羅巴女一人旅』（朝日書房、一九三三年）という書がある。昭和の初年代、ヨーロッパに、二〇代の女性がたった一人で旅行することが、かなりの困難を伴うことであったことを、暗に示すようなタイトルである。同書の冒頭には次のように書かれている。

「ナーニ、英国へ、

貴女お一人で？

而もシベリヤ経由で？

屈強の男子方でさへお連れをさがして船で行かれるのに貴女のように未だお若いお嬢さんが単身シベリヤを通つ

女性の視線

て外国へ乗込むなんて、ヘーイ」

と之こそ忘れもせぬ八月の或日私が旅券下附願を郷里の県庁へ差出した時係のお役人からジロリと穴の空く程見詰められて頂いた言葉、其上に「マアこの驚いたお転婆娘が！」と云はぬ許りの顔付である。

同書にはこの他にも、女一人旅であることから来る特別の視線にあったことと、これに対する意見とが数多く書かれている。文中に見られるように、行きはシベリヤ鉄道を選んだが、このシベリヤ鉄道も、女性には危険を伴うものとされたようである。女性の西洋訪問者は、確かに少なかった。

馬郡沙河子は、作中の言葉によれば、「市内某病院長令嬢、此度、英文学研究のため渡英」と紹介される人物である。

彼女の女性解放の視線については、同書の「はしがき」にも次のように書かれていた。

太陽の如く輝やかしかる可き女性が、日本に於ては余りに不自由な、余りに束縛多い生活の中に閉ぢ込められてゐる。(略)

翻つて欧米婦人の生活は？ それは真に自己を生かし自由を喜び人生を楽しんでゐるであらうか。私は屢々書物で映画で講演で座談で、外国婦人達の束縛のない明るい生々とした生活断片を知つた。併し「百聞は一見に如かず」である。(略)けれど女一人で海外に一歩足を踏み出す事の事実はなか／＼空想する程容易でなく、無謀に等しい位思ひ切つた冒険である。而し幸に理解深い父は旅費全部を心よく与へ、門出を喜んで呉れた事は私

一生の感謝である。

か弱い廿代の娘が单身シベリヤの荒野を通り、西の涯に旅する事は涙ぐましくも悲壮の感があるが、私の決心は強かつた。

ここには、『青鞥』創刊号（一九二一年九月）の平塚らいてうの「元始、女性は実に太陽であつた。」という言葉が遠く影を落としている。いわばそれを西洋において実際に見聞しようとする体験なのである。

同書のイタリア関係の目次は以下のとおりである。

ナポリの港

イタリアー学生気質

馬郡は、帰りはイギリスのリバプールにある「ローヤルドツク」から船路を採つた。船中ではクーパー夫妻と宣教師のミス・デントンという人物と親しくなり、船で立ち寄つたナポリでも共に市中の見物をしている。ナポリについては、次のように書いた。

人口約九十万、海岸だけに気持よさそうな都会、歴史にはあの大戦当時日本の将士達がその勇壮で歐洲の聯合艦隊を驚かせた所、又八阪丸遭難の場所としても感慨無量である。

これが彼女の、そしてこの時点での日本人のナポリの印象であった。

ナポリにおいては、遠くにヴェスビアス火山を見ながら、以下のような見物を行った。

噴火口やポンペイの廃墟は、又の日の見物として一行はナポリの博物館へ自動車を走らせた。其処には等身大の彫刻がいくつとなく並べてあつて、どれも之も有名なイタリー大理石像で実に見事なものであつた。私は日本人をモデルとした彫刻にはどうも感心出来ないので飽かず眺めた。

こうして、「美しいイタリー美人をモデルとしたものであらう」とされる「豊かな曲線美、なだらかな丸み」に目を見張っている。ここに女性モデルに対しての女性ならではの視線を見るのは穿ちすぎであらうか。

「車の中から眺めるポンペイ市中は衛生が行き届かず、不具者多く絵葉書を売る商人の顔もづるさうで「イタリーには世界中一番泥棒が多い」との言葉が思ひ出される、黒シャツ隊や警官の服装もいかめしい。」と、この時代特有の黒シャツ党の青年たちをも眺めながら、ガイドブックか何かで得た知識によるやや偏見に満ちた視線も見せている。一人旅であればこそ、周到な準備がなされたのであらう。

もう一点、大学の様子を見学して、日本との相違を強く見て取っている点にも、当時の女性らしい視線が認められる。

教師と学生とは大変親しく、まるで親友のやうにして芝居の話や音楽の話しに耽る。美術学校でも他の専門学

校でも、大学でも、すべて男女共学であるから多少のロマンスはあつても決してお芝居向きの筋にはならない。学生間では殆ど結婚した例のないのを見ても明かである。互に唄ひ互に論戦しても交際が乱れるやうな事はない。彼女達は生存の意義をよくわきまへ結婚を重大に考へてゐる。

最後の一文からも明らかなように、やはり彼女にとっては、女子学生に興味があつたようである。

もちろん、このような一人旅の例はむしろ稀で、誰かとともにヨーロッパを旅行した例は、まだしも見られる。与謝野晶子が与謝野寛を追いかけてパリに出かけたことはよく知られているであろう。このような例のうち、女性がその見聞記を書いたものも見られる。

市河 晴子

市河三喜・晴子『欧米の隅々』（研究社、一九三三年）は、英語学者市河三喜夫妻の海外見聞記である。夫妻は、フランスの銀行家アルベール・カーンによつて作られた、カーン海外旅行財団から資金を得て欧米旅行にでかけた。一九三一年のことである。市河三喜執筆の「はしがき」によると、二人は次のような役割分担をしている。

自分は主としてベーデカー其他の案内記を読んで次の日の行程、プログラムを作り、最も有効に一日を費すことを計画する、妻は宿に帰つてから、一日中に見聞した事件を細大漏さず書記す。

市河三喜の筆になる「旅程と感想」によると、二人は一九三二年三月に日本を出発し、八月三〇日にはイタリアに入り、「ミラン」に宿泊した。九月一日、「ジェノア」から「コート・ダジュール」に沿って「モナコ」に至り、ここから戻り、翌二日に「ピーザ」から「フロレンス」に行き、ここで四日間滞在し、「フィエソレ」を経て「ローマ」(「ヴェイカン」)で五日間滞在し、一二日に「ナポリ」(「ベスビオ」、「カプリ」)に移っている。次いで「アシジ」に一泊し、「ベニス」を経て、九月一六日にイタリアを去っている。

晴子によるイタリアの詳しい見聞記は、「中欧諸国とイタリア」の章に収められているが、そのうちイタリアの目は次は次のとおりである。

五、ファツシヨの国

六、永遠の都ローマ

七、ナポリからベニスまで

やや奇妙であるのは、「九月二日、イタリーに向って出発する」と、三喜の記述と日付が異なっている点である。

さて、彼等もまた、スイスから、「シンプロン」のトンネルを抜けてミラノに入った。「南の国へ来た」「ファツシヨの国へ来た」と第一印象を書き留めている。これについては、先の三喜の記述に詳しく書かれている。

旅行者の眼に映ずるファツシヨ党の勢力は甚だ顕著にして、各市町の街頭に其数非常に多く、到处にファツシ

ヨの記号とムツソリーの肖像を掲げ（略）、プラットフォーム、列車内の警戒、憲兵軍隊の警備等、戒厳令時の如く物々しき上に、列車内にはファツシヨ党が乗込み、（略）

このような出来事から、先の晴子の印象が生まれたようである。

ホテルは「大寺前の広場に面したホテル」と書かれている。

ドーム（大寺）を見学して外へ出た時、折しも行われていた空軍の示威運動に合わせ、これを見学している。

「ゼノア」では、「カンポ・サント」を見学し、「美術的お墓展覧会」「早く云ふと「おはか見」であると書く。墓の彫刻の美は、フランスのモンマルトル墓地、モンパルナス墓地、ペール・ラシエーズ墓地でもお馴染みのもので、これらの見学記には永井荷風の『ふらんす物語』（博文館、一九〇八年三月刊行予定、発売頒布禁止）に収められた「墓詣」があるが、晴子は、夫の死を悲しむ未亡人の彫刻を見て、「彫刻のよさとカララ大理石の艶が、埃がかゝつても着物などは、かへつて孺子のやうに見える美しさは、反感の中にも争ひ難く感心させられるが、何しろかうなると、良人たる者、夫人の皺くちやにならぬ前に死ぬ義務を生じさうだ。悲みを弄ぶのはい、事では無い」と非難も加えている。

「ピサ」では有名な斜塔に登っているが、ここでも独特の視線を見せている。

ただ、クリーム色の滑かな建築の狭間に輝く、イタリーの初秋の空の柔かな青い光が、其凄じかるべき印象を和めて、真昼の夢に音なく倒れる象牙の塔の趣なのを見出して嬉しい。さもなくて、たゞ建て損ひのま、五百年以

上も保つてゐる寺の畸形児を見に来たのでは、不具者の見世物に入ると同じ低級な物好きであるから。

次に訪れた「フロレンス」では、「ウツフィチ・ギヤラリー」などを訪れ、さらにその北方の古い町「フィエソレ」をも訪れたのである。

やがて、「ローマ」に至り、「ミネルバ・ホテル」に泊まっている。観光は、「クツクの遊覧団体」に加わった。「シヤラバン」とも書かれるこの一行が発券するのは、「遊覧自動車の発着所はバルベリーニ広場の近く」だと書き留められている。要するに、現在のバス・ツアーの一行に加わったわけである。

ツアーは、「コロシウム」から、「パラティンの岡の宮殿の跡」、「ローマン・フォーラム」、「アッピヤ門」などの名所を経て、「カタコム」を見学している。

翌日には、「カトリックの本山としてのローマ」を、「本山中の総本山セントピーターの大伽藍」から見て歩いている。「ヴァチカンの宮殿」も見ている。

翌日の記述の冒頭には、「今日も一人で、クツクのエキスカーションに行く」と書かれているので、ツアーに参加していたのは、晴子のみだったようである。このツアーは、「ローマからカンパニアの野を横切って、サピニの山にハドリアン帝のルインを尋ねるエキスカーション」である。ここを見学した際の感想が興味深い。

私は巍然として聳える北欧の城の大広間で、一体エリザベスとかマリヤ・テレサなんて方々になると、おしっこは出ないものかしら、あの長いトレインを引いて、どこまでしに行かれるのかと、幾度も疑ったが、こゝでは食

堂の裏手には、はゞかりなんて消極的な物許りでなく、積極的に口から吐く小部屋も並んで作っており、上下に空にしたお腹へ、又次の御馳走を詰める趣向だ。

と、あまり上品でないことまでしっかりと書き留められているのである。

ローマからナポリには、「三時間二十分」で移った。ホテルのベランダから「青い海にカステル・ヌオーヴォの古城」が突き出しているのが見えていると書かれているので、ホテルの多く並んでいた、サンタ・ルチアにあったホテルに泊まったようである。

「博物館」や「サンマルチーノの修道院」を見学し、次の日は、ヴェスピアスに登っている。やはり「クツク会社のアプト式電車」に乗り換えて登っている。その後、「マカロニ製造の盛んな町トツレ・アンヌンチヤータ」を通じて、「ポンペー」に到った。

翌日は、カプリに出かけたが、波が高く、有名な青の洞窟、「琅玕洞」「プリュー・グロット」の中には入れなかった。代わりに、島の上のアナカプリなどをケーブルで訪れている。

翌日はローマを素通りして「アシジ」に至り、さらに、一日かけて、汽車でベニスに向かった。その途中の汽車の中で、この国の地勢に思いを馳せながら、次のような感想を抱いている。女性らしい意見かも知れない。

ムッソリニは「産めよ増えよ。安住の地は俺が引受けた。」と大東な事を云ってゐる。領地拡大で、又国と国がいがみ合ふのか。それは、今更イタリーで事新しく感じるまでもない事だが、この男天下の国で特に思はせられ

るのは、今に「目下非常時だから女や弱い男は三分の一自殺しろ」なんて命令が出はしまいか。

これは、一九三一年、つまり昭和六年という年代を考え合わせば、実に成熟した意見といえよう。

やがてベニスに着き、ゴンドラで「リヤルトの橋」をくぐり、「グラン・キャナル」を進み、「サン・マルコ」に到り、「サン・マルコのお寺」や「ドーヂのパレス」などを見学した。

晴子がまとめたイタリアは「ムッソリニとマカロニの国」であった。その記述の端々に、女性らしい意見が顔を出している。例えばマカロニについては、先にみたハドリアン帝の住居を訪れた際の記事に次のようなものが見える。

食事は例の通りマカロニだ。トマトソースをかけて、チーズの粉をふって、フォークに巻いて食べる。口紅で、赤い紙を切つて張りつけた程に彩色したイタリア女が、小器用に水飴巻くやうにフォークに搦む。そこまでは小指なんか美しく曲げて、中々シークだが、さて口紅を保護する為に、パクリンと食べる段になると、清少納言に「凄じきもの」の中に数えられさうな図だ。

これと先に見たムッソリニについての意見とが、彼女のイタリア観を代表するのである。これは、極めて率直な観察といえよう。

やがて二人は、夜汽車でウィーンに向かった。

深尾須磨子

深尾須磨子は、一九三九年四月二二日、ナポリに上陸した。三度目のヨーロッパ旅行で、今回は日独伊親善協会の親善使節としてイタリアを訪れたのである。したがって、その使命のために、それまでのパリを中心とした二度のヨーロッパ訪問とは、決定的に意味を異にしていた。

この際のイタリア旅行については、『旅情記』（実業之日本社、一九四〇年）に詳しいが、その「ロオマ便り」の章には、次のように書かれている。

表向きに私が携へて来た数々の親善の使命としては、まだパウリツチ侯にお会ひして、高村光太郎氏の詩を呈上したばかりです。これからチアノ外相にも会はねばならず、それに、与謝野晶子夫人の献詩をダヌンチオの墓前に、北原白秋氏の詩をヒウミ氏に……それから、ならうことなら統帥ムツソリーニにもお目にかかりたし、それは表向きの使命以外単に深尾須磨子個人としても、ぜひにと願はずにはゐられません。

このとおり、詩を通じての親善であるが、ここにも明らかなように、ムツソリーニという存在が、このイタリア旅行を全面的に彩っていた。「あなたが日本婦人で、特に詩人だと云ふので、すぐに会ふことにした」（「その前後」とムツソリーニに言われたことが書き留められているが、この立場は、彼女のイタリアでの一貫したあり方でもあつ

た。「日独伊」の親善のつもりが、このムッソリーニの影響の大きさもあり、ドイツ訪問等は付けたりの感があるほどである。

深尾は、ナポリから、「超特急の快速列車」に乗って、ローマに入った。そうして一七日には、チアノ首相に面会し、使節としての役割を果たしている。やがて、六月二日の夜には、「ヴェネチア宮に一世の偉人の聲咳に接することが出来た」(「その前後」)。すなわち、ムッソリーニとの面談がなつたのである。この体験は大きく、深尾のこの当時の言説には、ムッソリーニへの手放しの絶賛があふれている。

『旅情記』の目次は以下のとおりであるが、多くの場面に、ムッソリーニとファシストの記事が登場するのである。

旅情記

その前後

航海挿話

大臣と女優

伊太利の女性

伊太利で邂つた人々

神の眼

光のをとめ

アダ・ネグリ

伊太利よさらば！

帰著早々

日本茶の使者

祖国の若き女性に

旅情便り

印度洋から

紅海にて

ロオマ便り

独伊の女性

ベルリンにて

シーザ荘にて

再び伊太利より

旅情日記

シーザ日記

シシリイ小記

本の終りに

女性の視線

たとえば「伊太利よさらば！」の章には、次のような記事が見える。

ロオマの松とロオマの泉の名曲で世界の楽界を唸らせた、亡きレスピーギの秘蔵弟子エニオ・ポリノが、私の作になるムツソリーニの頌一篇の曲を完成したのもその頃であつた。詩は過ぐる六月、ヴェネチア宮殿にムツソリーニに見えて、私みづから一世の偉人に捧げたもの。

その後、いったんイタリアを後にして、六月一〇日の夜、深尾はベルリンに向かった。そしてパリや南フランスを経て、再びイタリアに帰ってきた。そして、夏から秋にかけて、「フォルリ郊外のヴィラ・シーザ」にまる二ヶ月滞在したのである。

その後、ローマで、帰国のために乗船する宮崎丸を待つことになる。そして最後に、短いシシリー旅行にでかけ、宮崎丸を待つために一月二三日にナポリに戻った。宿はサンタ・ルチアに近い「ホテル・エキセルシヨ」であった。ここで、「N・Y・K」すなわち日本郵船の支社に電話をかけて確認すると、宮崎丸の出帆は延期になり、二九日の夜に出発ということになった。これが彼女のイタリア滞在の「旅情」のおおよそである。なお、『旅情記』には、当然ながら、この間訪れたベルリンなど他国の都市の記事も含まれるが、内容において、イタリアに触れる場合が多いので、先の目次にはすべて掲げてある。

最初にローマに滞在した際の記事には、「殆ど一日おき」に通った「G・I・L」のファシストの婦人についてのものがあちらこちらに見られる。「G・I・L」とは、*Gioventù Italiana Littorio* の略で、リットリオ青少年団とい

う、ファシズムの団体のことである。次の引用は、「ロオマ便り」の章からである。

伊太利全国には、G・I・Lの建物と云ふ半官的なファシストの設備が在つて、学校教育と相俟つて未来の国民の体育と精神的方面の嚴格な陶冶に當つてをりますが、その婦人指導者はローマから近いオルヴェイエトの町に設けられてゐる女子大学と師範の卒業生が任せられるので、つまりその指導者こそは、現在伊太利における婦人の理想の型とも云ふべく、しかも彼女等の美しさ、再び私は、ここにキャピトルの丘の有名なメジシのヴェナスを持出さなければなりません。(略)

ローマ市内で見かける一般婦人の姿にしても、その服飾は巴里あたりの婦人のそれに比べて聊か植民地風ですが、それがまた肉附きがよく、血色の鮮やかな伊太利女性にはかへつてびつたりとしてゐるやうです。全く美しい。それにはつらつとしてゐる。何よりも細心な身だしなみには感心します。

文中の「オルヴェイエト」については、「独伊の女性」の章に、「ローマから約三時間、(略) 駅前からケーブルカで昇りつめた丘の上である。ミケランジェロにゆかりのある古い部落で、有名なドーム風のモザイクの寺院があり、一体に宗教的でしづか^(マ)かなところである」と書かれている。

このとおり、女性の美については絶賛している。しかしながら、特にファシストの女性の美については、注意書きが必要である。深尾は「ロオマ便り」の中でさらに次のように書いている。

女性の視線

まづファッシスト女子青年団の運動競技場をはじめとして、無産者の子女に施す職業教育の設備、放課後の小学校やカレージの女生徒を集めて体育や手芸その他を授ける設備等、いづれも前に述べたファッシストのモットーを真髄として、未来における伊太利の理想の母を作りあげようとする努力が遺憾なく窺はれました(略)

このように、特殊な時代背景を背負った「美」であることはいうまでもない。

もう一つ、この章には、女性に関して、興味深い記述が見える。それは、与謝野晶子についてである。

与謝野晶子夫人の有名なこと、愛敬され、憧憬されてゐることはむしろ日本以上です。何と云ふ皮肉でせう。燦たる極東の明星！とパウリツチ侯も讃へられるし、会ふほどの人がまづマダム・ヨサノ・アキコを口にする。私の鼻の高さ。大詩人故ベルトラメリが与謝野夫人について書いたものを見ても、その認識の正確なこと驚くべきものです。芸術に国境が無いにしても、これは全くあまりに皮肉な不思議、それだけに与謝野夫人の昇華力の無比無類を、また改めて讃へずにはゐられません。(略)

それから、日本の若い女性たちよ、どうぞユニクな日本女性であることに誇りを持し、文化の向上をめてしめ真直に頭をもちあげて下さい。伊太利の若い女性たちが、どんなに強い信念に燃えて、その一步一步を誇らしく踏みしめてゐるか、(略)

このとおり、与謝野晶子の著名さは、日本の若い女性を鼓舞することにも形容詞としてかかっているのである。

深尾のイタリアの訪問先については、二つの特徴がある。一つは、「フォルリのシーザ」に長期滞在したこと。もう一つは、帰る間際によった、「シシリイ」の訪問である。これらについては、前掲の目次のとおり、「旅情日記」として「シーザ日記」と「シシリイ小記」が用意されていることからわかる。

シーザには、特に思い入れがあった。「シーザ荘にて」に「ムツソリーニの生れ故郷に近い小村」と書かれるとおり、ムツソリーニにつながるからである。「ここから二十キロメートル弱離れたブレダピオの村、ムツソリーニはこの鍛冶屋の息子に生れついた」のである。このとおり、深尾の見たイタリアは、かなり偏っている。ただ、思い入りの理由にはもう一点、彼女が詩人であることも関係している。ここで滞在した「ヴィラ・シーザ」は、亡き親日家の詩人アントニオ・ベルトラメーリの元の邸宅で、今はその姉のマリア・ベルトラメーリが管理していたのである。ムツソリーニに会えたのも、マリアの配慮によったものであったようである。

深尾はこのマリアを始め、シーザの女性たちについても多く書いている。「伊太利の女性」には次のようにある。

シーザにただ一軒のよろづ屋のおかみさん、と云つてもとづくに五十を過ぎた年配ながら、その美しさには、ヴィナス以上に聖母に近いところがあつた。ロマーニヤ県の女は一体に聖母型である。外気で鍛へられた彼女等の美しさは、黒木綿の労働著に包まれてゐても光つてゐる。(略)

すんなりとした姿で自転車を走らせるロマーニヤ娘たち、私はあんなにも美しい田舎娘を見たことが無い。

(略)

結局、美しきもの、情熱に燃ゆるもの、生活苦を越えて伸びゆくもの、伊太利の女性、と云ふことになる。

また、「再び伊太利より」の章には、次のような記述も見える。

私の眼は、裏門（シーザ荘の——引用者注）を出たところの、灌漑用の貯水場を見つめた儘釘付けになりま
す。それはかなり深く、大きなセメントの円い水盤なのですが、その中で、折からカツカと照りつける午後の陽
に半裸体を燃やししながら、附近の娘たちが妖精沐浴（ニムフ）の図を現実（ニムフ）に描いてゐるのです。園丁の娘ジュリアーナを
中心に、いづれも十八九から二十三の娘かばり（ニムフ）が五六人、たがひに奔放なポーズで、水をかけ合ふやら、抱き
合つてをどるやら、歌ふやら、さては飛び込みの真似をするやらで、（略）思ひきり若さに生きぬく妖精たちの
姿と、それを鎧扉のすきから垣間見る私の姿とを、かりにも比べて見る勇気を私はとても持合せません。

ここには、間接的ながら、自分という日本の女性との比較を通じての、女性のあり方の違いへの素直な驚きが見え
る。やはり深尾は、女性に強く興味をもっているようである。

この他、例えばローマについても、「その前後」に次のような長期滞在者の視線を感じる記述が見える。

コンドツテイの通り、といへば、古今芸術家の博物館、とでも名づけたいほどに、あらゆる世界的画家や文学
者、さては音楽家の筆蹟や肖像写真で壁を埋めた古いカフェ・グレコがあり、また伊太利名物のレンチ人形の売
店その他、仏蘭西物や英国物の高価品をさらに飾つてゐる高級な店が並んだりしてゐて、ロオマでの一等シツク
な商店街である。

自ら「貧しい寡婦のひとり旅」と呼んだこのやや長いイタリア滞在のなかで、女性詩人「ピアンカ・カファロ」や、ヴィラ・シーザの女主人「マリア・ベルトラメリ」など、女性たちとの親身な交友は特記しておくべきであろう。それは、寂しさを感じる「ひとり旅」の中で、イタリア旅行の印象を決定づけるものであったと想像されるからである。彼女のイタリア旅行記は、彼女のイタリア女性記でもあったのである。

同じ旅行のもう一つの成果である、深尾の『ロオマの泉』（新興亜社、一九四一年）のイタリア関係の記事目次は以下のとおりである。

ロオマの泉

ロオマの泉

ロオマの薔薇

永遠の故郷

イタリアの田舎

偉人の手

地中海とイタリア

ロオマから

パリ・挽歌

地球は廻る

女性の視線

女性の視線

フランスを憶ふ

地中海の水

海・断想

帰朝報告

記事は『旅情記』と同じような内容が多く含まれている。例えば「オルヴェイエトの町の女子体育大学」について、「ロオマから」の章に次のような記事が見える。

既に一ヶ月のロオマ滞在で、私はイタリヤの若い母性の立場をも熱心に見せて貰ひました。イタリヤの未来の妻であり、母である彼女等を集めて、精神的に、肉体的に、理想的訓練を施さうとするファツシストの設備は、実に完備の極致であります。大理石づくめの立派な建物は一見科学と美の殿堂であり、そこに収容されてゐる若い女性たちは、いづれも「信ぜよ、服従せよ、戦へ」と云ふファツシストの信条と、「美の無きところに文化無し」のムツソリーニ統帥の言葉とを精神の糧として、健康潑刺たる、そして美しい動きを見せてをります。それは全く眩しいくらゐであります。

ここまですれば、やや少し行き過ぎの感もする。「帰朝報告」にも、次のような勇ましい言葉が見える。

たとへば、私がイタリアヤのロオマで見ました全国女性行進の中には、鉄砲隊や戦車隊、それからヘルメット帽を被り、銃を肩にした一隊もあるくらいで、特にイタリアヤの若い婦人の間には、さうした動きが、いつそ華やかなと云ふ形容を被せたいくらい潑刺たる傾向を見せてをります。さうした身心の鍛錬は、また一方明日のイタリアヤが必要とする理想の母を目ざして行はれてゐることも勿論であります。とにかく若い婦人たちの健康なこと、張りきつてゐること、一見火花を感じるくらいであります。

ここには、時代のあまりに偏った影響が見受けられるが、それにしても、婦人たちの「潑刺」さへの羨望は、その時代性を取り除いても、日本女性との対比から残るのかもしれない。彼女もやはり、女性の立場から、日本女性の現状を相対化していることは確かであろう。

野上弥生子

野上弥生子は昭和一三年の秋から翌昭和一四年の冬にかけて、すなわち一九三八年から一九三九年にかけてヨーロッパを訪れ、イタリアには、一九三八年一月に着いてからの約一カ月間と、一九三九年五月と、二度訪れた。これについては、別稿にも書いたとおりである。彼女のイタリア旅行には、そこに息子素一が留学中であつたこともあり、母親の顔が覗く。

先の深尾須磨子の『旅情記』の「ロオマ便り」の冒頭には、「五月十日、ローマにて」と書かれているが、この章

の最後には、次のような興味深い言葉が見える。

今日あたり、野上弥生子夫人も、夫君野上博士と共にローマに来られるはずです。思ひがけないところで、夫人にお会ひ出来るのはうれしいことです。

これは日付から見ても、一九三九年五月のことであろう。実は深尾は、野上弥生子と会えることを嬉しいと書きながら、そこにはやや複雑な心境が交じっていた。同じ『旅情記』の「シーザ荘にて」においては、次のように書かれている。

ローマや巴里では、ちよつと野上女史にお邂逅しましたが、夫君の博士と御一緒に、それに息子さんまでがおいでになつていろいろと世話をしつらつしやる。伯林で、これもちよつとお目にかかつた吉岡弥生女史、それがまた息子さんと御同道で、いかにもゆつたりとした御様子、といった次第で、さすが孤独に慣れた私も、思はず指をくはへてしまひました。笑はないで下さい。全く笑ひごとではありません。この苦しさは……。

この記述には、深尾の一人旅の寂しさが表されているが、逆にいえば、野上弥生子のそれが、人に羨まれるような旅であつたことが浮かび上がる。

野上弥生子『欧米の旅』上（岩波書店、一九四二年）の記述には、母親または女性としての視線が頻出する。たとえば野上は息子をSの頭文字で、たびたび登場させる。一九三九年五月一六日の項には、「まる五ヶ月ぶりでもう一

度ローマに来た。Sに再び逢へるのはうれしい。」といった具合である。一つ一つの記述はあっさりとしているが、この地では通訳も兼ねるSこと素一に頼りきっている様子が窺える。

また、深尾と同時期にイタリアを訪れたにしては、ムツソリーニおよびファシズムに対して、実に冷静な観察をしていることも興味深い。次は「ナポリからローマへ」の一節である。

イタリアで暮らして、わけてもイタリア人そのものに陽気になると云ふのは、マカロニを食べるなど命じるのと同じくらゐ困難なことからしい。(略)

義務教育も、ファッショの政府になつてからは力を入れてはゐるが、女中や下男で文字を解しないのは沢山あり、新聞もみんなには読まれない有様ながら、この欠陥を償つて、文化的にも、政治的にも彼らを訓練して、『アノイ・ムツソリーニ』とヴェネチア広場で叫ばせるまでに仕上げるのは、街頭の、珈琲店の、酒場の、また近所づきあひの高調子の会話である。その意味から彼らのさかんな舌の交換は、その舌でたくし込む毎日のマカロニとともに、なくてはならないものである。

これらはやはり、公私にわたり深尾とはやや違う視線といえようか。

ただし旅程はよく似ていた。たとえば野上もまた、深尾と同様、「シチリア」を訪れた。「シラクーサ」では同じ「オテル・エトランゼ」に泊まっている。そのイタリアへの視線は全く異なっていたが、旅をすることにおいては、同じ視線を共有したのである。